第1章：秘めやかな宿、浴衣の帯と解かれる心

山間の駅に降り立つと、きんと冷えた空気が頬を撫でた。
吐く息が白く染まる。
冬の入り口に差し掛かった季節の風は冷たいけれど、隣に彼女がいるという事実だけで、僕の身体は芯から火が灯ったように温かかった。

「先輩、待ってください。マフラー、曲がってますよ」

鈴を転がすような、それでいてどこか湿度を帯びた甘い声。
振り返ると、そこには黒みを帯びた紫色のロングヘアを風になびかせた少女——桜がいた。

彼女は少し背伸びをして、僕の首元のマフラーを丁寧に直し始める。
その仕草の一つ一つが、まるで宝物を扱うかのように慎重で、そして献身的だった。

「……はい、これで大丈夫です。風邪を引いたら大変ですから」

「ありがとう、桜。桜こそ、寒くないか？」

「ふふ、大丈夫ですよ。先輩が手を繋いでくれていますから」

桜はそう言って、恥ずかしそうに、けれど力強く僕の手を握り返してくる。
華奢に見えて、家事で鍛えられた指先。その体温が愛おしい。

僕たちは今日、少し遅めの休暇を取って、人里離れた温泉旅館へとやってきていた。
誰にも邪魔されない、二人だけの時間。
彼女――間桐桜が、あの悪夢のような日々から解放され、本当の意味で笑えるようになってから、約一年の月日が流れている。

今の彼女は、普通の少女だ。
料理を作り、洗濯物を干し、時には僕をからかい、そしてこうして恋人としての時間を過ごしている。

けれど時折、ふとした瞬間に見せる瞳の奥の揺らぎが、彼女が背負ってきた過酷な過去を物語る。
魔術師の家系、養子としての孤独、そして蟲による陵辱の日々。
それら全てを受け止めて、僕は彼女を選んだ。

「先輩？　どうしました、急に黙り込んで」

「いや……桜とこうして旅行に来られて、本当に良かったなって」

「……もう。先輩ったら、急にそんなこと言うんですから」

桜の頬が、薄っすらと朱に染まる。
彼女は嬉しそうに目を細めると、さらに身体を密着させてきた。
分厚いコート越しでも分かる、豊満すぎるほどの柔らかい感触。

彼女の身体は、その可憐な雰囲気とは裏腹に、暴力的なまでの女性的魅力を秘めている。
歩くたびに二の腕に押し当てられるその質量に、僕は平静を保つのに必死だった。

◇

予約していた旅館「花霞（はながすみ）」は、渓谷沿いに佇む隠れ家のような宿だった。
純和風の数寄屋造り。廊下はピカピカに磨き上げられ、静寂の中に鹿威（ししおど）しの音が響いている。
女将に案内されたのは、離れにある露天風呂付きの客室だった。
「うわぁ……すごいです、先輩。こんな素敵なお部屋……私にはもったいないくらい」
部屋に入り、女将が下がった途端、桜は感嘆の声を漏らして畳の上にぺたんと座り込んだ。
広縁（ひろえん）の窓からは、紅葉が終わりかけの木々と、湯気を上げる露天風呂が見える。

「もったいなくないよ。桜には、これくらい贅沢しても罰は当たらない」

「……そうですか？　でも、お値段高かったんじゃないですか？　私、もっと安いプランでも十分に幸せでしたのに」

「いいんだよ。僕が桜に見せたかったんだ。それに、桜はずっと頑張ってきただろ？」

荷物を置きながらそう言うと、桜は少しだけ伏し目がちになり、それから優しく微笑んだ。その笑顔には、以前のような影はない。ただ純粋な、僕への信頼だけがある。

「ありがとうございます、先輩。……先輩がそう言ってくれるなら、私は素直に甘えちゃいますね」

「ああ、存分に甘えてくれ」

桜は立ち上がると、慣れた手付きでお茶を淹れ始めた。

茶葉の香りが部屋に漂う。彼女が淹れるお茶は、いつだって完璧な温度と味だ。
湯呑みを差し出す際、彼女の指先が僕の指に触れる。
ほんの一瞬の接触。それだけで、部屋の空気が変わった気がした。

「……先輩。お茶菓子、食べさせてあげましょうか？」

「えっ」

「ふふ、誰も見てませんよ？　ここには私と先輩だけです」

桜は悪戯っぽく微笑むと、卓上の饅頭を小さく割り、僕の口元へと運んでくる。
普段は控えめな彼女だが、二人きりになるとこうして大胆になることがある。
それは彼女なりの愛情表現であり、同時に「自分を見てほしい」という渇望の裏返しでもあるのだと、僕は知っている。

僕は少し照れながらも、彼女の指先ごと饅頭を口に含んだ。
甘い餡の味と、微かに感じる彼女の指の塩気。
僕が指先を舌でなぞると、桜は「んっ……」と小さく肩を震わせ、耳まで真っ赤にして俯いた。

「せ、先輩……いきなりそういうことするのは、反則です……」

「桜が仕掛けてきたんじゃないか」

「うぅ……そうですけど……でも、嫌じゃなかったです」

上目遣いで見つめてくる瞳。
その潤んだ瞳に見つめられると、理性が溶け出しそうになる。
まだ到着したばかりだ。温泉にも入っていない。
けれど、この閉ざされた空間には、すでに濃密な情欲の気配が漂い始めていた。

◇

夕食までの時間、まずはひとっ風呂浴びようということになった。
部屋には檜の露天風呂がついているが、まずは身体を休めるために浴衣に着替える。

「先輩、その……帯、結んでもらえませんか？」

衝立（ついたて）の向こうから、着替えを終えた桜が姿を現した。
息を呑んだ。

藍色の生地に、薄紅色の桜の花びらが散らされた浴衣。
それが、彼女の白磁のような肌と、艶やかな菫色の髪を見事に引き立てている。
そして何より、浴衣という衣服は、彼女の身体のラインを隠すようでいて、その実、扇情的に強調していた。
帯によって締め上げられた腰のくびれ。

そこからなだらかに広がる腰の曲線。
そして、合わせ目がはちきれんばかりに主張する、豊かな胸の膨らみ。

サイズが合っていないわけではない。彼女のプロポーションが、既製品の規格を凌駕しているのだ。
薄い布一枚隔てた向こう側に、重力に逆らうような果実が存在しているのがありありと分かる。

「……先輩？　変、でしょうか……？」

「いや、すごく似合ってる。綺麗だよ、桜」

「ほ、本当ですか？　よかった……。あの、それで、帯がうまく結べなくて……手伝っていただけますか？」

桜は背中を向けて、僕に帯の端を差し出した。

ほっそりとしたうなじ。後れ毛が数本、白いうなじにかかっているのが何とも艶めかしい。

僕は震える手で帯を受け取り、彼女の腰に回した。

身体が密着する。

背中から抱きしめるような格好になる。

彼女の背中の温もりと、甘い花の香りが鼻腔をくすぐる。

「……んっ、先輩の手、温かい……」

「きつくないか？」

「はい、ちょうどいいです。……あ、もう少しいいです。もっと、ぎゅっとしてください」

桜が僕の腕に自分の手を重ね、さらに強く抱き寄せるように誘導する。

彼女の背中が僕の胸板に押し付けられ、ふわりとしたお尻の感触が下腹部に伝わる。

帯を結ぶという行為が、いつの間にか抱擁へと変わっていく。

「先輩……」

「ん？」

「私、今、夢みたいです」

桜は夢見心地な声で呟いた。

「こんなふうに、綺麗な浴衣を着て、大好きな先輩と温泉に来て……。昔の私なら、想像もできなかった。自分が幸せになるなんて、許されないと思ってましたから」

彼女の声が少し震える。

かつて間桐の家で受けた仕打ち。蟲蔵での絶望。

彼女の身体には、消えない傷跡が――物理的なものではなく、精神的な傷跡が残っている。

けれど今、僕の腕の中にいる彼女は、震えながらも確かな体温を持ってここに存在している。

「許されないなんてこと、あるもんか。桜は誰よりも幸せになるべきだ」

「……先輩」

僕は結び終えた帯の手を離さず、そのまま彼女を正面から抱きしめた。
桜もまた、僕の背中に腕を回し、胸に顔を埋めてくる。
浴衣越しに感じる、大きく柔らかな胸の弾力。
心臓の音が、互いに聞こえるほどに近い。

「先輩の匂いがします……。落ち着く……」

「僕もだよ。桜の匂い、好きだ」

「……えへへ。先輩、大好き……」

彼女は爪先立ちになり、僕の耳元で甘く囁いた。
その吐息が耳の奥を痺れさせ、理性のタガを一つ外す。
僕はたまらず、彼女の顎を持ち上げて唇を重ねた。

「んむっ……」

軽いバードキスのつもりだった。
けれど、桜がそれを許さなかった。
彼女は濡れた唇を少し開き、僕の舌を招き入れるように絡め取ってくる。

控えめな性格の彼女が、キスの時だけは貪欲になる。
失われた時間を埋めるように、僕の唾液を、熱を、存在そのものを欲しがるように。

「んっ、ちゅ……ふぁ、せん、ぱい……んぅ……」

静かな部屋に、水音が響く。
帯を結び終えたばかりの浴衣が、少しずつ乱れていく。
襟元がはだけ、豊かな胸の谷間が露わになる。白く、滑らかな肌。
そこにキスマークをつけたい衝動に駆られるが、これから温泉に入るところだと思い出し、何とか自制する。

唇を離すと、銀色の糸が二人の間に引かれた。
桜はとろんとした瞳で、熱っぽく僕を見上げている。

「先輩……お風呂、入るんですよね？」

「……ああ、そのつもりだけど」

「じゃあ、続きは……お風呂の中で、してもいいですか？」

その誘い文句は、あまりにも強烈だった。
上気した頬。乱れた襟元。期待と羞恥が入り混じった表情。
彼女は「清楚」という皮を被った、魔性の存在なのかもしれない。

「……混浴だぞ、部屋の露天風呂は」

「はい。だから……先輩に、身体を洗ってほしいんです。……私の全部、見てほしいから」

桜は僕の手を取り、自分の胸元へと導いた。
柔らかい。とてつもなく柔らかく、そして熱い。
掌から伝わる彼女の鼓動が、早鐘を打っているのが分かる。

「先輩、行きましょう。……湯冷めしちゃいますよ？」

小悪魔のように微笑むと、桜は僕の手を引いて広縁の方へと歩き出した。
ガラス戸の向こう、湯気を上げる露天風呂が僕たちを待っている。

夜の帳が下り始め、薄暗くなった景色の中で、湯面だけが揺らめいている。

僕たちは乱れた浴衣を整えることもせず、互いの体温を確かめ合いながら、湯煙の向こう側へと足を踏み入れた。

そこから始まるのは、誰の目も気にすることのない、二人だけの秘め事。

旅館の夜は、まだ始まったばかりだ。

第12章：湯けむりの秘密、桜色の熱帯夜

広縁の窓を開け放つと、外の冷気が一気に室内の熱を奪い去った。

夜の闇に包まれた露天風呂は、湯気と外灯の柔らかな光に満ちている。

「ふぅ……ちょっと寒いですね」

桜はそう言いながらも、僕の手を離そうとしない。

むしろ、冷えを感じてさらに密着してきた。

僕たちは、ついさっき帯を解き、再び床に広げた浴衣の前に並び立つ。
彼女は僕の顔を見上げ、熱っぽい視線を送ってくる。

「先輩。ここで、脱いじゃいますか？」

その声は、控えめな彼女からは想像もできないほど、積極的な誘いを含んでいた。
浴衣の襟元がはだける。露わになったのは、白く滑らかな鎖骨と、深い谷間の始まり。

「ああ。湯冷めする前に、早く入ろう」

僕は自分で言った言葉が、なぜか説得力のない、乾いた音に聞こえた。
僕の視線が、隠しきれない彼女の膨らみに釘付けになっているのを、桜は気づいている。

「……じゃあ、失礼しますね」

桜はゆっくりと、左前の打ち合わせにかけられた細い紐を解いた。
その仕草は、まるで舞台の幕が開くかのように荘厳で、僕の視線は一瞬たりとも動かせなかった。

紐が解かれ、浴衣が両肩から滑り落ちる。
衣擦れの音さえも、この静寂の中ではやけに大きく響いた。

浴衣が畳の上に、薄い花びらのように落ちる。
そこに現れたのは、夜の帳と湯気の光の中で、あまりにも完璧な、僕だけの肉体だった。
ストレートの紫髪と、和風の客室という背景が、彼女の白さを際立たせる。
そして、その身体の中心で、誰もが目を奪われるほどの存在感を放つ、双つの大きな蕾。

「どう、ですか……先輩？」

桜は、誇らしげに、少しだけ胸を張った。
あの凛とした姉の、そのさらに上を行く豊満さ。

それは、以前の彼女にとって、間桐の魔術による呪いの象徴であり、隠すべきものだった。
だが、今は違う。彼女はそれを、僕が愛し、求めている証だと知っている。

「私……最近、自分のここが、好きになれたんです。先輩が、いつも、すごく見てくれるから」

桜の視線は、僕の目を離れない。
その瞳には、羞恥心と確かな自信が同居していた。

「先輩を……先輩を、こんなに夢中にさせられるのは、これのおかげかな、って」

彼女は、僕の視線が集中している箇所を、そっと両手で包み込んだ。
大きな、本当に大きな、柔らかい胸。
掌に収まりきらないその質量は、僕の欲望を刺激するには十分すぎるほどだった。

「……」

「ふふ。先輩、声が出なくなっちゃってますよ？　……もっと、見てください。私、先輩に見られると、すごく熱くなっちゃうんです」

桜は熱を帯びた吐息を漏らし、わずかに身をよじった。

僕はもう、理性を保つことができなかった。

◇

「桜……もう、限界だ」

僕は彼女の残りの衣類――下着の細い布地も、ためらいなく取り去った。

僕も服を脱ぎ捨て、裸のまま彼女を抱きしめる。

肌と肌が触れ合う瞬間、冷えた空気に晒されていた皮膚が、互いの体温で急速に温められた。

「んっ……あぁ、先輩……あったかい……」

桜は僕の首に腕を回し、まるで水を得た魚のように、全身の力を抜いて僕に寄りかかった。
胸部の接触面は、まさに爆発的だった。
柔らかい肉の塊が、僕の胸板に押しつけられ、その感触は僕の全神経をその一点に集中させる。

「行こう、桜。冷える前に」

「はい……」

僕たちは抱き合ったまま、数歩で露天風呂へと続く石段を降りた。
湯舟の縁に足をつけ、熱い湯気に包まれる。

「あぁ……気持ちいい……」

湯は熱くもなく、ぬるくもない。体温よりも少し高いくらいの、心地よい温度だった。
湯の中に沈み込むと、水面が二人の身体を優しく包み込む。
暗闇の中、湯気と静寂だけがある。
桜は僕の正面に座り、膝を抱えるような体勢になった。

「先輩。約束、覚えてますか？」

「……身体を洗ってほしい、だったな」

「はい。……私の、全部を」

彼女の潤んだ目が、夜の闇の中で強く光っている。
僕が躊躇うことなく、湯舟の縁に用意された桶と石鹸を手にしたのを確認すると、桜は満足そうに微笑んだ。

「じゃあ、まずは背中から……お願いします」

桜は背中を向け、湯舟の縁に肘をついた。
濡れた紫色の髪が、露天風呂の湯面に長く垂れている。
僕は石鹸を泡立てたタオルを手に取り、彼女の背中へと滑らせた。

「んぅ……っ」

湯で温められた背中を、優しくタオルが往復する。
彼女の背中には、目に見えない無数の傷跡が刻まれている。あの蟲に嬲られ続けた、過去の記憶。

「力を、抜いて」

「……はい」

僕は声をかけながら、決して焦らず、慈しむように、彼女の白い肌を洗い続けた。

肩甲骨のライン。細い腰のくびれ。そして、腰椎から臀部にかけての、滑らかな曲線。
タオルが股の付け根近くまで進むと、桜の身体が震えた。

「先輩の、手が……熱い」

「ごめん、気持ちよかったか？」

「……気持ちいい、です。先輩に触られていると、私の中の悪いものまで、全部洗い流されるみたいで……」

彼女が振り返り、僕の胸板に再びもたれかかってくる。

「今度は、正面ですね」

湯舟の中で、桜は僕に背中を預ける形になった。
彼女は自分の両腕を上げ、まるで降参するかのように無防備な姿勢になる。

僕の前に現れたのは、湯気に濡れた、世界で最も美しい景色だった。
石鹸をつけた僕の手が、首筋から滑り降りる。
鎖骨。胸元。

そして、その巨大な胸部へと到達した。
温かい湯の中で、その質量はさらに重力に逆らうように張っている。
僕は両手でその果実を包み込むようにして、優しく洗ってやる。

「んあ……っ、先輩……そこ……」

湯の熱とは違う、彼女自身の熱が、僕の手のひらに伝わってくる。
揉むように洗う手の動きに合わせて、胸が柔らかく揺れる。

「気持ちいいか、桜？」

僕が囁くと、彼女は甘い吐息で応える。

「んんっ……き、もちいい……先輩の手、私、大好き……」

彼女は身体を前に滑らせ、僕の太ももの間に腰を下ろした。
湯の中に沈んだ下半身が、微かに触れ合う。
そして、桜は僕の胸に顔を埋め、まるで自分の胸の動きを隠すようにした。

しかし、その動作は逆に僕を興奮させた。
桜が身じろぎするたび、僕の胸と彼女の胸が、柔らかな衝撃音を立ててぶつかり合う。

「先輩……っ、自分で、洗えますから……」

「ダメだ。全部、僕にやらせてくれ」

僕は彼女の抵抗を無視し、さらに熱心に胸を洗い続けた。

彼女の肌は湯で濡れているのに、僕の指が触れた場所だけ、妙に滑らかで熱い。

「もっと、力を入れても……いいですよ。私、先輩になら、何をされても……大丈夫ですから……っ」

それは、彼女の過去を知る僕にとって、あまりにも切実な言葉だった。

誰かに触れられることに怯えていた彼女が、今、僕に対して全身全霊の信頼を寄せている。

僕はタオルを捨て、素手で彼女の胸を鷲掴みにした。

湯に濡れた肌が滑り、指の間に深く、その柔らかい重みが食い込む。

「んんんっ！　や、だめ、先輩っ……そこ……」

彼女は湯の中で腰を反らし、僕の胸元から顔を上げた。

その表情は、快感と恥ずかしさでぐしゃぐしゃに歪んでいる。

「桜……可愛いよ」

僕がそう言って、熱を帯びた吐息を彼女の耳元に吹きかけると、桜はもう言葉を発することができなくなった。

ただ、湯気を纏った肌が、僕の手の中で熱く震え続けているだけだった。

「先輩……ふぅ……もう、私の身体、先輩のものなんだから……好きに、して……」

甘い言葉と、湯の熱。

理性が完全に溶け去る前に、僕は残りの行程へと移る必要があった。

この湯の中で、僕たちは互いの全てを解放する。

夜は長く、そして熱い。湯けむりの向こう側には、誰にも知られてはいけない、桜色の秘密が待っている。

第3章：濡れた髪、熱を孕んだ布団の中で

露天風呂から上がると、身体の芯まで火照っているはずなのに、肌を滑る水滴が外気で冷やされていく感覚があった。
けれど、それ以上に熱いものが、僕の隣に張り付いている。

「先輩……ふう、のぼせちゃいそうです……」

桜は上気した頬を僕の濡れた肩に押し付け、とろんとした瞳で見上げてくる。
湯気で湿った紫色の髪が、白い肌に艶めかしく張り付いている。
バスタオルを羽織る暇もなく、僕たちは互いの体温を求め合うように抱き合ったまま、部屋の中へと戻った。

「身体、拭かないとな」

「……はい。先輩、拭いてくださいますか？」

桜は甘えるように両手を広げた。

その無防備な仕草に、心臓が跳ねる。
僕はバスタオルを手に取り、彼女の柔らかな肌に残る水滴を吸い取っていく。
首筋、背中、くびれ。そして、豊かな胸の谷間に溜まった雫。

「んっ……あ、そこ……くすぐったい、です……」

タオル越しに触れるだけでも、彼女の身体は敏感に反応し、甘い声を漏らす。
特に、先ほどお湯の中で執拗に愛でた胸は、わずかな刺激でも先端が尖り、主張しているのがわかった。

「桜、肌が……真っ赤だ」

「だって……先輩が、お風呂であんなに……いじめるから……」

彼女は恨めしそうに、でも嬉しそうに呟く。
水滴を拭き終えると、彼女は自らバスタオルを床に落とした。

部屋の照明の下、露わになった肢体は、湯上がりの熱で淡い桜色に染まっている。

「もう……我慢、できません」

「うわっ、桜！？」

桜は僕の手首を掴むと、そのまま布団の上へと押し倒してきた。
普段のおっとりした彼女からは想像できないほどの力強さと、切羽詰まった情熱。
僕が畳の上に敷かれた布団に背中をつくと、すぐに桜が覆いかぶさってくる。
視界いっぱいに広がるのは、彼女の圧倒的な女性性の象徴――大きく、重たげに揺れる胸だった。

◇

「先輩……私のこと、もっと見て……」

桜は僕の太ももを跨ぐようにして座り込むと、自身の胸を両手で持ち上げ、僕の目の前に突き出した。
重力に逆らいきれず、たわわに実った果実。
白い肌に、薄紅色の頂が興奮で硬く尖っている。

「姉さんよりも……大きくなっちゃいました。……先輩は、大きいほうが好きですか？」

かつてコンプレックスだったそれを、今は武器として、僕を誘惑するために使っている。
彼女の瞳が妖しく光る。

「ああ、大好きだ。桜の全部が愛おしいけど……そこも、たまらなく好きだ」

「ふふ……嬉しい。先輩専用の、ミルクタンクですね……」

桜は自嘲気味に、けれどどこか誇らしげに笑うと、ゆっくりと身体を沈めてきた。
柔らかい熱の塊が、僕の顔に押し当てられる。

「んっ……はぁ……先輩の顔、熱い……」

視界が肌色に埋め尽くされ、鼻腔が彼女の甘い匂いで満たされる。
僕はたまらず、目の前の果実に吸い付いた。

「ひゃうっ！？」

舌先で転がし、唇で含み、吸い上げる。
その瞬間、桜の喉から甲高い喘ぎ声が弾けた。

「あっ、あぁっ！　先輩、だめっ、そこ吸っちゃ……んんっ！」

彼女の腰がビクリと跳ねる。けれど、逃げようとはしない。むしろ、僕の頭を抱え込み、さらに深く押し付けてくる。
家事で鍛えられた指が、僕の髪をくしゃくしゃに掻き回す。

「はぁ、あ、あぁ……っ！　すごい、先輩の舌……ざらざらして……頭、おかしくなるぅ……っ」

右を愛でれば左が寂しがり、左を愛でれば右が欲しがる。
僕は両手でその溢れんばかりの質量を揉みしだきながら、交互に貪り続けた。
指が沈み込むほどの柔らかさ。まるでマシュマロの中に熱いシロップが詰まっているようだ。

「んくっ、ふあぁっ……！　もっと、もっと強く……っ！　壊れるくらい、揉んで……っ！」

桜の理性が、音を立てて崩れていくのがわかる。
彼女の中に巣食っていた「穢れ」という思い込みが、僕の愛撫によって「快楽」と「愛」に塗り替えられていく。
彼女は泣きそうな顔で、快感に溺れていた。

◇

「桜、こっちを見て」

僕は一度彼女の胸から顔を離し、潤んだ瞳を見つめた。
桜は荒い息をつきながら、とろんとした目で僕を見つめ返す。

「はぁ、はぁ……先輩……？」

「キスしよう」

僕が上体を起こすと、桜は吸い寄せられるように唇を寄せてきた。
触れ合った瞬間、互いの舌が絡み合う。
先ほどまでの優しいキスではない。互いの呼吸を奪い合うような、獣じみた貪欲な口づけ。

「んっ、ふ……ちゅぷ、れろ……んむっ……」

唾液が混じり合う水音が、静かな部屋に響き渡る。
桜の舌が、僕の口内をくまなく舐め回し、僕の舌に絡みついて離れない。

「んんーっ……！　ぷはっ……せ、んぱい……大好き、愛してる……っ」

息継ぎの瞬間、桜が切れ切れに愛の言葉を囁く。
その言葉のすべてが、僕の胸を焦がす。

「私も……先輩の味、もっとほしい……」

彼女は再び唇を塞いできた。
今度は僕を布団に押し付け、上から覆いかぶさるようにして、深々と舌を差し込んでくる。
その合間にも、僕の手は彼女の背中を、腰を、そして柔らかい太ももを撫で回していた。
指先が触れるたび、彼女の身体がピクリと震え、口の中に甘い吐息が流れ込んでくる。

（あぁ、幸せ……。先輩に触れられると、私が私でいられる……）

桜の心の声が聞こえてくるようだった。
かつて蟲に侵された身体。自分は汚れていると嘆いた日々。
けれど今、僕が触れているのは「間桐の玩具」ではない。「僕の恋人」としての桜だ。

「んっ、ぁ……先輩の手、いやらしい……。でも、嬉しい……」

僕の手が、いつの間にか彼女の秘所へと伸びていた。
指先が触れた瞬間、桜はビクリと身体を硬直させ、唇を離した。

「あっ……そこ、もう……ぐちょぐちょ、かも……」

「……確かめてもいいか？」

「……はい。先輩になら……何をされても、いい……」

桜は恥じらいながらも、自ら太ももを開いた。
そこには、愛液で濡れそぼった花弁があった。
僕が視線を向けるだけで、彼女は羞恥と快感で身をよじり、枕に顔を埋める。

「うぅ……見ないでください……でも、見てほしい……」

矛盾する言葉。それが彼女の今のすべてだ。
僕は指を、その濡れた場所へと這わせた。

「ひぁっ！？」

粘り気のある音がして、僕の指が彼女の中に吸い込まれる。
熱い。温泉よりもずっと熱く、締め付けるような圧迫感。

「あ、あっ、あぁっ！　先輩の指、入って……んぅっ、奥、当たって……っ！」

桜はシーツを強く握りしめ、弓なりになって喘いだ。
大きな胸が激しく上下し、汗ばんだ肌が照明を反射して輝いている。

「桜、気持ちいいか？」

「は、はいぃっ！　すご、すごい……先輩、もっと……かき回して……っ！」

彼女の懇願に応えるように、僕は指の動きを早めた。
ぬちゅ、ぐちゅ、という卑猥な音が部屋に充満する。

「あぁっ、あぁっ、いくっ！　先輩、私、おかしくなっちゃう……っ！　頭、真っ白に……っ！」

桜の瞳から焦点が消え、快楽の波に飲み込まれていく。
その姿は、あまりにも淫らで、そして神々しいほどに美しかった。

「先輩……先輩……っ！」

彼女は僕の名前を呼びながら、何度目かの絶頂を迎えようとしていた。
だが、これはまだ序章に過ぎない。
僕たちはまだ、本当の意味で一つにはなっていないのだから。

夜は深く、布団の中は灼熱の園。
僕たちの愛を確かめ合う長い夜は、ここからが本番だ。

第4章：甘い蜜、桜色の母性と貫かれる愛

「はぁ、ぁ……先輩、先輩……っ」

指による愛撫で絶頂を迎えた桜は、力なく布団の上に手足を投げ出し、荒い呼吸を繰り返していた。
乱れた紫色の髪が、汗ばんだ白い肌に張り付いている。
虚ろな瞳は快楽の余韻に浸り、半開きの唇からは熱い吐息が漏れ続けていた。

僕はその愛おしい姿を見下ろし、再び彼女の豊満な胸へと顔を寄せた。
先ほどの愛撫で紅潮し、さらに張り詰めたように見える双丘。
薄紅色の突起は、主の興奮を訴えるように硬く尖り、ぷっくりと膨れ上がっている。

「……んっ、先輩？　まだ……そこ、いじめるんですか……？」

桜は弱々しく抗議するような声を上げるが、その手は僕の頭を優しく抱き寄せ、拒絶どころか歓迎していた。

「桜のここが、僕を呼んでる気がして」

「……もう。先輩ったら……変態、です」

桜は恥ずかしそうに頬を染めながらも、自ら胸を寄せて谷間を作る。
僕はその誘いに乗り、右側の膨らみに吸い付いた。

「んぁっ……！」

舌先で乳輪をなぞり、先端を甘噛みする。
敏感になっているそこは、わずかな刺激でも桜の背中を弓なりにさせた。

「あ、あっ……ふぅっ、先輩……そこ、さっきよりも……敏感に、なってて……っ」

「甘いな。桜の肌は、どうしてこんなに甘い匂いがするんだろう」

「そ、そんなこと……ないです……。ただの、汗の匂い……ひゃうっ！？」

僕は否定する言葉を遮るように、先端を強く吸い上げた。
ジュ、ジュプ、と卑猥な水音が部屋に響く。
まるで赤子が母親に乳をねだるように、一心不乱に吸い続ける。

「あぁっ、んんっ！　先輩、そんなに強く吸ったら……っ！　本当になにか、出ちゃいそう……っ！」

桜の言葉に、僕の嗜虐心と独占欲が刺激される。

「出していいよ。桜の全部、僕が飲み干してあげる」

「あっ、あぁ……っ！　先輩……すごい、吸い方……っ！　身体の奥から、全部吸い取られちゃう……っ！」

桜は僕の頭を強く抱きしめ、母性的な表情と、快楽に溺れる雌の表情を交互に見せた。彼女の中で、「守るべき対象」としての先輩と、「自分を犯す男」としての先輩が混ざり合っていく。

「いいですよ、先輩……。たくさん、飲んで……。私は先輩の……先輩だけの、ものだから……」

彼女はそう囁くと、自ら乳房を押しつぶすようにして、僕の口の中に押し込んでくる。
それはまさに、授乳の光景だった。
ただし、そこにあるのは聖母の慈愛ではなく、濃密な情欲と背徳感。
吸われるたびに、彼女の子宮の奥が疼き、愛液が溢れ出しているのが分かった。
「んくっ、はぁ……っ。乳首、いじられると……下のほう、うずいて……また、おかしくなりそう……っ」

◇

胸への愛撫を続けながら、僕はゆっくりと身体を滑らせ、彼女の開かれた股間へと移動した。
そこはもう、濡れそぼって準備万端だった。
秘所から溢れた蜜が、太ももの内側まで伝い落ちている。

「桜……もう、我慢できない。入れたい」

「……はい。私も……先輩のが、ほしい……」

桜は潤んだ瞳で僕を見つめ、ゆっくりと膝を立てて脚を大きく開いた。
恥じらいと期待に震えるその秘部は、ひくひくと収縮を繰り返し、僕を受け入れる準備を整えている。

僕は自身の昂りを、彼女の濡れた入り口にあてがった。
熱い。火傷しそうなほどの熱気が、接触点から伝わってくる。

「入れるよ……」

「……んっ、来て……先輩……っ」

僕はゆっくりと腰を沈めた。

亀頭が窄まりを押し広げ、熱く湿った肉壁の中へと侵入していく。

「あ……っ、んぐっ……！　おっきい……先輩の、入ってきた……っ」

きつい。一年間、何度も身体を重ねてきたはずなのに、桜の中はまるで処女のように僕を締め付けてくる。

ひだの一枚一枚が僕の形を認識し、絡みついてくるようだ。

「くっ……すごい締め付けだ、桜……」

「だって……先輩のこと、大好きだから……離したくないんです……っ」

根元まで沈めると、僕たちは互いの身体が隙間なく密着し、完全に一つになった。

深い結合感に、互いにため息が漏れる。

「はぁ……っ、奥まで……いっぱいです……」

「動くぞ……」

「はい……っ、めちゃくちゃに、してください……っ」

僕はゆっくりと腰を引いては打ち付ける、ピストン運動を開始した。

「んっ、ぁ……！　あっ、あっ、んぁっ！」

肉と肉がぶつかり合う音と、水音が混じり合う。
最初は優しく、徐々に激しく。
僕が突くたびに、桜の大きな胸がたぷん、たぷんと激しく揺れ動き、視覚的にも僕を煽り立てる。

「あぁっ、先輩、そこっ！　そこダメ、深いっ……！　んあぁっ！」

彼女の弱点である奥の最深部を擦り上げると、桜は声にならない悲鳴を上げてシーツを掴んだ。
長い脚が僕の腰に絡みつき、逃さないようにと締め付けてくる。
「桜、中……すごく熱い、溶けそうだ」
「私も……っ、先輩のが、熱くて……お腹の中、掻き回されて……っ！　頭、とろとろに……っ」

◇

快楽の波は、加速度的に高まっていく。
僕は彼女の胸に再び顔を埋め、激しく突き上げながら乳首を甘噛みした。
「ひゃぁっ！？　上も下も……だめ、そんなの……っ！　あぁっ、あっ、あっ！」
上下からの同時責めに、桜の許容量は限界を超えようとしていた。

彼女の目は白目を剥きかけ、口からは涎が糸を引いている。
普段の清楚な彼女からは想像もつかない、淫らで、そして最高に愛おしい姿。

「桜、いくぞ……っ！　中に出す……！」

「あぁっ、はいっ！　先輩、出してっ！　私の深くに……先輩の熱いの、全部っ……！」

「――っ！！」

僕は腰を強く打ち付け、彼女の最深部に楔を打ち込んだ。
限界に達した欲望が、熱い奔流となって彼女の中に解き放たれる。

「んぎぃっ――！！　あぁぁぁぁぁぁっ！！」

桜は背中を大きく反らし、絶叫に近い喘ぎ声を上げて絶頂を迎えた。
膣壁が激しく痙攣し、僕の吐き出す精を搾り取るように脈打つ。

僕もまた、彼女の収縮に締め上げられ、一滴残らず彼女の中に注ぎ込んだ。

長い、長い絶頂の時間が過ぎる。
やがて痙攣が収まると、僕たちは糸が切れた人形のように重なり合い、荒い呼吸だけが部屋に響いた。

「はぁ、はぁ……ぅ、ん……」

桜の身体はまだ微かに震えている。
僕は彼女の顔にかかった髪を払い、汗ばんだ額にキスをした。

「……桜、大丈夫か？」

「は、い……。すごかった……です。先輩の愛、お腹いっぱいに……」
桜はとろんとした瞳で僕を見つめ、愛おしそうにお腹をさすった。

その表情は、恋人のそれであり、同時に聖母のような慈愛に満ちていた。

「先輩……大好き。ずっと、こうしていたいです……」

「ああ、僕もだ。愛してるよ、桜」

僕たちは繋がったまま、互いの体温と、満たされた幸福感を噛みしめる。
温泉宿の夜は更けていくが、二人の時間はまだ終わらない。
この温もりこそが、僕たちが求めていた「日常」の先にある、特別な幸せなのだから。

最終章：桜色の刻印、永遠に続く愛の証

「あっ、んあっ、あぁぁっ！　先輩、先輩っ……！」

部屋中に響き渡るのは、肉体が打ち付け合う湿った音と、桜の甘く切ない喘ぎ声だけだった。

結合部は蜜で濡れそぼり、動くたびに卑猥な水音を立てて、僕の理性を削り取っていく。
僕は彼女の腰を強く掴み、何度も、何度も、その深淵へと楔を打ち込み続けていた。
桜の身体は熱い。溶鉱炉のように煮えたぎる胎内が、僕の全てを飲み込もうと吸い付いてくる。

「桜、すごい……中、うねってる……」

「だ、だめぇ……っ！　そんな、深いところ……擦られたら……っ！　私、また……っ！」

桜はシーツを握りしめ、首を激しく振って快楽に耐えている。
汗ばんだ紫色の髪が乱れ、白い肌に張り付く様は、言葉にできないほど扇情的だ。
そして何より、僕が突くたびに大きく波打つ、その豊かな胸。
まるで独立した生き物のように揺れ動き、僕の視覚を暴力的なまでに刺激する。

「先輩……っ、キス……キスして……っ」

桜が苦しげに腕を伸ばし、僕の首に絡みついてきた。
僕は動きを止めず、彼女の唇に覆いかぶさる。

「んむっ……ちゅ、ぷ……んんっ……！」

舌と舌が絡み合い、互いの唾液を貪る。
下半身での激しい繋がりと、唇での甘い繋がり。
上からも下からも注がれる愛情と快楽に、桜の思考は完全に溶けているようだった。
彼女の瞳はとろんと濁り、ただひたすらに僕を求めている。

（あぁ、先輩……。私の中に、先輩がいる……。痛いくらいに、私を愛してくれている……）

彼女の心の震えが、締め付ける膣壁を通じて伝わってくるようだった。
かつては痛みと屈辱でしか満たされなかった彼女の器が、今は僕の熱と愛だけで満たされている。

「んぅ、ぁ……！　先輩、もっと……もっと奥まで……っ！　私の全部、先輩で埋めて……っ！」
懇願するような彼女の言葉に、僕の限界も近づいていた。
脊髄を駆け上がる痺れ。爆発寸前の衝動。
「桜……！　愛してる……っ！」
「私も……！　愛してます、先輩っ……！　おかしくなるくらい……大好きっ……！」

◇

ラストスパート。
僕は彼女の足を自分の肩に担ぎ上げ、さらに深く、最も深い場所へと腰を突き入れた。
「ひぃいっ！？　そこっ、そこは……っ！　あぁっ、あぁっ！」

子宮口をノックされる感触に、桜が声にならない悲鳴を上げる。
けれど、彼女は逃げようとはしなかった。
むしろ、腰を浮かせて僕を迎え入れ、その両足で僕の背中を強く締め付けてくる。

「一緒に……っ！　先輩、一緒に行きましょう……っ！」

「ああ……っ！　出すぞ、桜……っ！」

「はいっ！　くださいっ……！　先輩の熱いの、全部……私の中にっ……！」

その言葉が、最後の引き金だった。
僕は彼女の最深部に楔を打ち込み、渾身の力で抱きしめた。

「っ――――！！」

「んぎぃぃぃぃぃぃっ――――！！」

二人の身体が同時に硬直し、視界が真っ白に弾けた。
僕の身体の奥底から、熱い奔流が彼女の中へと放たれる。
ドクンドクンと脈打ちながら、僕の命そのものを彼女の胎内へと注ぎ込む。

桜の膣壁が激しく痙攣し、僕の放出に合わせて収縮を繰り返す。
まるで一滴も漏らさず、僕の全てを飲み干そうとするかのように。

「あぁっ、あぁ……っ！　先輩っ、入ってる……っ！　熱いのが、ドクドクって……いっぱい……っ！」

桜は涙を流しながら、恍惚の表情で天井を見上げていた。
白目を剥きかけ、口からは涎がこぼれている。
その姿はあまりにも無防備で、そして残酷なまでに美しかった。

僕たちは長い時間、繋がったまま動けずにいた。
射精の余韻。筋肉の弛緩。
ただ荒い呼吸音だけが重なり合い、部屋の空気を震わせていた。

「はぁ、はぁ……先輩……」

やがて、桜が力の入らない腕を伸ばし、僕の頬に触れた。

「……全部、入りましたね」

彼女はとろけるような笑顔で、僕のお腹の下――まだ繋がっている部分を愛おしそうに見つめた。

「私のお腹……先輩でいっぱいです。……幸せ」

その言葉に、胸が締め付けられるほど愛しさが込み上げた。

◇

ゆっくりと身体を離すと、あふれ出た白濁混じりの蜜が、とろりとシーツにこぼれ落ちた。
それが、僕たちが愛し合った確かな証拠に見えて、僕は再び彼女を抱き寄せた。

「桜……」

「……ん……先輩……」

汗で濡れた身体同士が密着する。不快感など微塵もない。
むしろ、その粘り気さえもが愛おしかった。
僕は彼女の額、瞼、頬、そして唇へと、雨のようにキスを降らせた。

「ありがとう、桜。……最高だった」

「私も……です。今までの人生で、一番……幸せでした」

桜は僕の胸に顔を埋め、深呼吸をするように匂いを嗅いだ。
その大きな胸が、僕の胸板にむにゅりと押し付けられる。
事後の敏感になった肌に、その柔らかさと体温はあまりにも心地よかった。

「先輩。……明日も、明後日も、ずっとこうして……一緒にいてくれますか？」

ふと、彼女が不安げな声で問いかけた。
幸せであればあるほど、それが壊れることを恐れる彼女の癖。
僕は彼女の顎を持ち上げ、その瞳を真っ直ぐに見つめた。

「当たり前だろ。僕はもう、桜なしじゃ生きられない身体にされちゃったからな」

「ふふ……責任、取ってくださいね？」

「ああ。一生かけて責任を取るよ」

僕がそう答えると、桜はようやく心からの安堵を見せ、花が咲くように微笑んだ。

「……はい。覚悟してくださいね、先輩。私、先輩のこと……骨の髄まで愛し尽くしますから」

その瞳には、かつてのような暗い影はない。

あるのは、少し重くて、とてつもなく深い、僕への愛情だけだ。

彼女は僕の首に腕を回し、再び唇を求めてきた。

「んっ……ちゅ……」

優しく、甘い、おやすみのキス。

けれど、そのキスは一度では終わらず、二度、三度と繰り返される。

互いの体温を確かめ合うように、僕たちは布団の中でじゃれ合い続けた。

窓の外は深い闇に包まれているけれど、僕たちの周りには、確かな春の陽だまりがあった。
この温泉旅行は、僕たちの新しい日常の始まりに過ぎない。
これからも、この愛おしい少女と共に歩んでいく。
時に泣き、時に笑い、そしてこうして互いの熱を溶け合わせながら。

「大好きです、先輩。……おやすみなさい」

桜の甘い吐息と共に、僕は幸福な眠りへと落ちていった。
腕の中には、世界で一番大切な、桜色の温もりを抱きしめたまま。

エピローグ：朝陽に溶ける吐息、二人だけの愛の檻

障子の隙間から差し込む淡い朝陽が、乱れきった布団を白く照らし出していた。
まどろみの中で意識が浮上すると、鼻先をくすぐるのは甘い花の香りと、昨夜の情事の名残である濃密な雌の匂い。

「……ん……せんぱい、おはようございます……」

耳元で、鈴を転がすような、それでいて艶を帯びた声が響く。
重いまぶたを開けると、そこには僕の胸に頬を乗せ、とろんとした瞳で見つめてくる桜がいた。
彼女の身体は、掛け布団から滑り出た白い肩に、昨夜僕が刻み込んだ赤いキスマークがいくつも咲き乱れている。

「おはよう、桜。……早起きだね」

「ふふ、先輩の寝顔……ずっと見ていたくて。幸せすぎて、目が覚めちゃったんです」

桜は猫のように喉を鳴らし、僕の胸板に顔を擦り付けてくる。
素肌と素肌が触れ合う感触。彼女の大きく柔らかな胸が、押し潰されるようにして僕の肌に密着している。

その体温と弾力だけで、朝の生理現象が鎌首をもたげるには十分すぎた。

「あっ……先輩、元気ですね……」

下腹部に硬いものが当たる感触に気づき、桜が妖艶に微笑む。

彼女の手が、シーツの下でゆっくりと這い回り、僕の昂りを優しく握りしめた。

「ひゃっ……桜？」

「……ダメですよ、先輩。昨日の夜、あんなに愛し合ったのに……まだ、こんなに大きくなって……」

口では咎めるようなことを言いながら、彼女の指先は巧みに動き、僕を刺激してくる。

昨夜の行為で敏感になっている部分を、熱い掌で包み込み、しごき上げる。

「んっ、くぅ……っ！　桜、朝から……」

「先輩が悪いんですよ……？　無防備な顔で寝てて……私を、誘うから……」

桜は僕の上に跨ると、掛け布団を腰まで引き下げた。

朝陽に照らされた彼女の裸体は、神々しいほどに美しく、そして背徳的なほどに淫らだった。

豊かな胸が重力に引かれて揺れ、先端の薄紅色は興奮で硬く尖っている。

「朝ごはんの前に……もう一回、いただきまーす」

◇

「んむっ……ちゅ、じゅる……っ」

桜は僕の唇を奪うと、貪るように舌を絡めてきた。

昨夜あれほど求めたのに、彼女の渇きはまだ癒えていないようだった。

いや、愛すれば愛するほど、彼女の愛は深く、重くなっていくのかもしれない。

「んぁ、ぷはっ……先輩、味……濃い……っ」

唇を離すと、銀色の糸が二人の間に引かれる。
桜は潤んだ瞳で僕を見下ろし、ゆっくりと腰を沈め始めた。

「……入れますね。……先輩の、熱いの……」

濡れた秘所が、僕の先端を捉える。
昨夜の余韻で柔らかく解れた肉の道が、ぬるりと僕を飲み込んでいく。

「ぁ……っ、んんっ……！　入った……先輩、朝から……大きい……っ」

桜が大きく息を吐き出し、背中を反らせる。
その拍子に、彼女の豊かな胸がたぷん、と大きく波打つ。

僕はその光景に理性を焼かれ、彼女の腰を掴んで突き上げた。

「あぁっ、んっ！　先輩、動かないで……っ！　私が、するから……っ！」

桜は僕の手を振りほどき、僕の胸に手をついて自ら腰を動かし始めた。

上下に、そして円を描くように。

彼女の膣内は、まるで生き物のようにうねり、僕を搾り取ろうと締め付けてくる。

「はぁ、あぁ……っ！　先輩、ここ……一番奥、当たってる……っ！　気持ちいい……っ！」

「桜、中……すごい締め付けだ……」

「だって……離したくないから……っ。先輩は私の……私だけのものだから……っ！」

彼女の瞳に、暗い執着の炎が揺らめく。

間桐の家で味わった絶望的な孤独。それを埋められるのは、僕の存在だけ。

だからこそ、彼女は貪欲に、骨の髄まで僕を愛し尽くそうとする。

「ねぇ、先輩……気持ちいいですか？　私の身体……最高ですか？」

「ああ……最高だ。桜以外、考えられない」

「嬉しい……っ！　あぁっ、んあぁっ！　もっと、もっと奥まで……突き刺して……っ！」

桜の動きが激しくなる。
濡れた結合部から、グチュ、グチュ、と卑猥な水音が絶え間なく響く。
汗ばんだ肌が擦れ合い、互いの体液と匂いが混じり合う。
それは、世界で一番濃厚な朝の儀式だった。

「いくっ、私……また、いっちゃう……っ！　先輩も、一緒に……っ！」

「ああ……出すぞ、桜！」

僕は彼女の腰を強く掴み、下から激しく突き上げた。
敏感な最深部を容赦なく抉る。

「ひギィッ！？　あぁぁぁぁぁっ――――！！」

桜が絶叫し、全身を硬直させる。
その瞬間、僕も限界を迎え、彼女の中に熱い白濁を解き放った。

「っ――――！！」

ドクンドクンと脈打つ開放感。
桜の胎内が激しく収縮し、僕のすべてを飲み干そうとする。
彼女は恍惚の表情で白目を剥き、口からは涎を垂らして快楽に溺れていた。

◇

長い余韻の後、僕たちは重なり合ったまま、荒い呼吸を整えていた。
桜は僕の胸に顔を埋め、まだピクピクと痙攣している身体を預けている。

「はぁ、はぁ……先輩……大好き……」

「僕もだよ、桜……」

僕は汗で濡れた彼女の髪を優しく撫でた。
窓の外からは小鳥のさえずりが聞こえる。平和で、穏やかな朝。
けれど、布団の中だけは、濃厚な情欲の香りが充満していた。

「……帰りたくないですね」

桜がポツリと呟く。

「ずっと、ここに閉じ込められて……先輩と二人きりで、こうしてイチャイチャしてたいです」

「……それも悪くないけど、家に帰っても一緒だろ？」

僕がそう言うと、桜は顔を上げ、花が咲くように嬉しそうに微笑んだ。

「……はい！　そうですね。お家には、私たちの日常が待ってますから」

彼女は身体を起こすと、僕のお腹の上で正座をした。
逆光を浴びたその姿は、逆説的だが聖母のように清らかに見えた。

「先輩。私、先輩のおかげで……自分が生まれてきた意味、やっと分かりました」

「え？」

「私は、先輩に愛されて、先輩を愛するために生まれてきたんです」

彼女は僕の顔を両手で包み込み、深く、長い口づけを落とした。

「んっ……ちゅ……。これからも、覚悟してくださいね？　私、先輩のこと……絶対に離しませんから」

その言葉は、甘い呪いのように僕の心臓を縛り付けた。

でも、それは僕が望んで受け入れた愛の形だ。

「さあ、シャワー浴びてきましょうか。……また、洗いっこしますか？」

桜は悪戯っぽく微笑み、僕の手を引く。

この温泉旅行は終わりを迎えるけれど、僕たちの「溶け合う」日々は、これからも永遠に続いていく。

彼女の大きな愛と、深い闇ごと抱きしめて。

～完～